

『古代アメリカ』 *América Antigua*
第 23 号, 2020 年, 抜刷 (pp.91-102)

<調査研究速報>

ペルー南海岸、エストゥディアンテ遺跡調査概報

松本雄一
(山形大学)
ホルヘ・オラーノ
(パリ第一大学大学院)
坂井正人
(山形大学)

Excavations at Estudiante, South Coast of Peru

Yuichi Matsumoto
(Yamagata University)
Jorge Olano
(Ecole Doctorale d'Archéologie, Université Panthéon-Sorbonne, Paris 1)
Masato Sakai
(Yamagata University)

古代アメリカ学会
Sociedad Japonesa de Estudios sobre la América Antigua
Japan Society for Studies of Ancient America

<調査研究速報>

ペルー南海岸、エストゥディアンテ遺跡調査概報

松本雄一（山形大学）
 ホルヘ・オラーノ（パリ第一大学大学院）
 坂井正人（山形大学）

1. はじめに

ペルー南海岸（図1）、インヘニオ河谷下流域に位置するエストゥディアンテ遺跡（図2）では、自然の丘陵をテラス状に整形した建築が4ヘクタールにわたって広がっており、同遺跡はその規模の大きさから考古学者の注目を集めていた〔Silverman 2002; Silverman and Proulx 2002〕。エストゥディアンテ遺跡ではこれまで発掘調査が行われてこなかったため、ナスカ早期（紀元前260-紀元後80年; 表1）^{（註1）}の遺跡であるということ以外に詳しいことは分かっていなかった。しかし、山形大学チームによる2013-2016年の踏査と2017年の発掘調査によって、その編年上の正確な位置づけが明らかとなり、遺跡の性質を考察することが可能となった〔Sakai and Olano Canales 2017〕。本論では、山形大学チームのエストゥディアンテ遺跡に関する調査成果をこれまでの先行研究との関わりで考察し、ナスカ早期社会に関するその含意を論じる。

時期名	年代	土器編年
パラカス後期	紀元前 380-260 年	オクカへ 8-9
ナスカ早期 (パラカス-ナスカ移行期)	紀元前 260-紀元後 80 年	オクカへ 10 ナスカ 1
ナスカ前期	紀元後 80-300 年	ナスカ 2-3
ナスカ中期	紀元後 300-440 年	ナスカ 4-5
ナスカ後期	紀元後 440-640 年	ナスカ 6-7
ワリ期	紀元後 640-790 年	ロロ/チャキパンパ
イカ期	紀元後 1180-1560	イカ

表1 本論で用いる編年

（Unkel et al. 2012:より松本雄一が作成、日本語の時期名称に関しては松本 2019 に準じた）

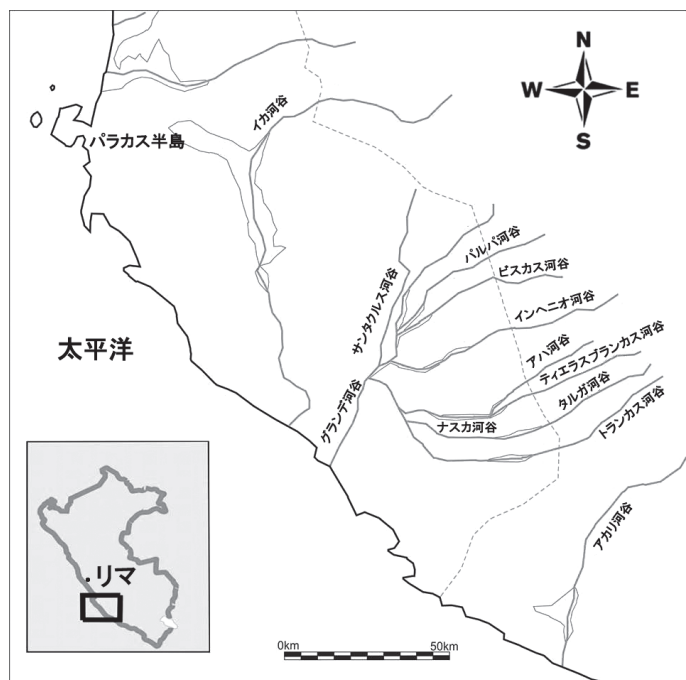


図1 ペルー南海岸

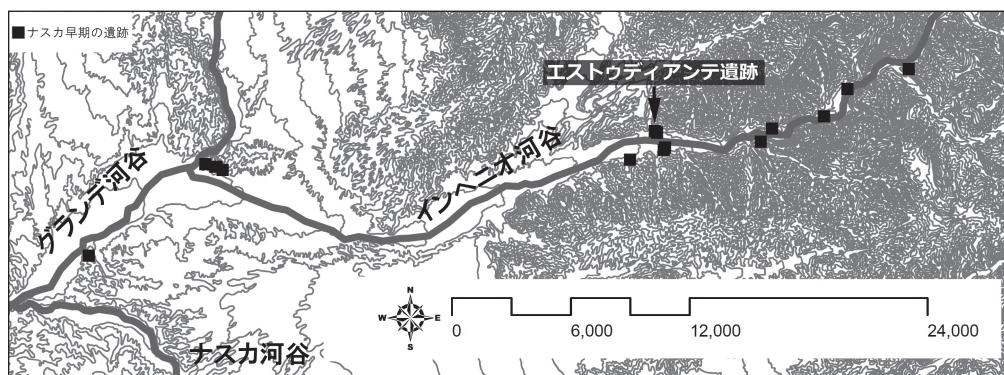


図2 インヘニオ河谷とエストゥディアンテ遺跡の位置

2. 先行研究と調査の経緯

エストゥディアンテ遺跡に関する現時点で唯一の先行研究は、アメリカ合衆国の考古学者であるヘレイン・シルバーマン (Helaine Silverman) によって1988年から1989年にかけて行われたインヘニオ河谷の踏査によるデータである [Silverman 1990, 2002]。彼女はエストゥディアンテ遺跡を遺跡番号455番として登録し、地表面で確認可能な建築と土器編年にもとづいて、同遺跡をナスカ^(註2)の遺跡であるとした [Silverman 2002: 78-81]。つまりナスカ早期の遺跡に比定することができる。さらに遺跡をAからHの8つに区分けし、住居や公共的空間などそれぞれに機能が存在する可能性を論じた。

また彼女は、マウンド建築などモニュメントとしてのワカ (Huaca) と区画化された空間を持つ「建築」を区別することの重要性を指摘した。後者はより公共的な機能を持ち、場合によってはエリートの住居であった可

能性があるという。後者のような空間としてエストゥディアンテ遺跡は位置づけられている [Silverman 2002: 44, 146]。

シルバーマンによれば遺跡に見られるようなテラス状の部屋状構造が、居住のために用いられたのか、公共祭祀的な用途に用いられたのかは不明であるが^(註3)、遺跡の建築はその質によって二つのグループに分けることが可能であり、規格化された建築とそうでない建築が丘陵の斜面に分かれて分布していると観察している [Silverman 2002: 78; Silverman and Proulx 2002: 107-108]^(註4)。ここで重要なのは彼女が、エリート層という社会階層の存在を想定している点であろう。このようなシルバーマンの先駆的な研究に基づき、我々はエストゥディアンテ遺跡の調査に際して以下の二つの課題を設定した。

- 1) エストゥディアンテ遺跡に関する編年的な位置づけを確定する。遺跡の規模を考えると、シルバーマンが設定したそれぞれの区がすべて同時期（ナスカ早期）のものかどうかは判断しがたい。
- 2) エストゥディアンテ遺跡を建造し、用いた集団の社会組織を考察する。建築の質だけではなく、発掘によるデータから社会組織をより具体的に考察することが必要である。

3. 2013-2016 年度の踏査

2013 年から 2016 年にかけて山形大学チームはインヘニオ河谷流域の網羅的な調査を行った [松本 2019]。その過程で筆者たちはエストゥディアンテ遺跡を、2013 年、2014 年、2016 年の 3 回訪れ、表面に現れた建築と土器をはじめとする遺物の詳細な観察を行った。

その際のデータは、シルバーマンが想定したような「ナスカ早期にのみ機能した遺跡」とは異なるイメージを示した。遺跡表面に散乱している土器を見てみると、A-B 区に関してはシルバーマンが述べる通りナスカ 1 の土器が大部分を占めるものの、1000 年以上時期が下るイカ期（紀元後 1180-1540 年）の土器も少数存在しており、C 区に関してはむしろイカ期の土器の方が多く、G 区に関してはその全てがイカ期の土器であった。さらに、D 区からは少量のナスカ前期（紀元後 80-300 年）の土器が確認されたのである。そして E-F 区ではほとんど時期決定の指標となるような土器を確認することはできなかった。

一方で建築に関しては、丘の斜面にテラス上の建築が連なり、場所によって建築の質が異なるというシルバーマンの記述通りの傾向が見て取れた。

4. 2017 年の発掘調査

上記のような踏査成果に基づいて、2017 年度にはシルバーマンの区分の A-C 区に焦点を当てた発掘調査を行った。A-C 区には、質の異なる建築が分布しており、エリート層の存在を想定するシルバーマンの視点を検証しナスカ早期の社会組織を考察することができると考えられたからである。また、C 区に関してはイカ期の土器が数多く表面に見られたため、エストゥディアンテ遺跡の編年を再検討するという課題に関しても適していると思われる。本調査では、より詳細な表面観察に基づいて遺跡を Sector I-V の 5 つに区分した。シルバーマンの分類とは異なるが、発掘区を設けた Sector I-III に関していえば、シルバーマンの区分における A-C 区にほぼ対応する (図 3)。以下では、我々の遺跡内区分 Sector I-III を用い、各区において特に重要な発掘区の成果に関する概略を述べる。

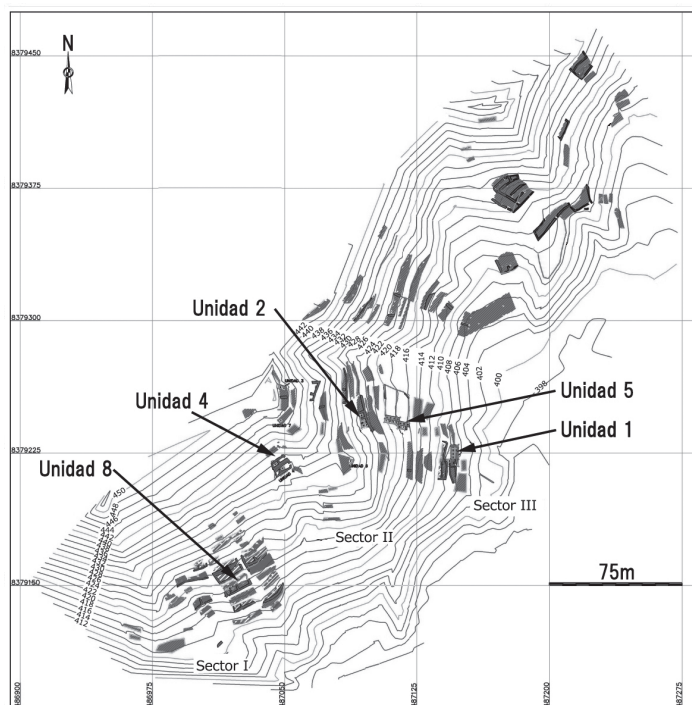


図3 エストゥディアンテ遺跡全体図（陰で示された部分が人工のテラス状構造物）

4-1. Sector I の発掘

建築は丘陵の中腹に集中しており、斜面をテラス状に成形して部屋状構造が造られている。シルバーマンはこの部分の建築の質の高さに注目し、エリート層の居住域か、公共的な性格を有する非居住空間であったと想定している [Silverman 2002: 78, 5.27]。この区において、テラスは地形に合わせて北東―南西方向に長軸をもって展開しており、6 段のテラスが平行に配置されている。2017 年の調査においては、ほぼ中央に位置する 16m × 3m のテラスに 8m × 4m の発掘区（Unidad 8）を設定した（図 4, 5）。

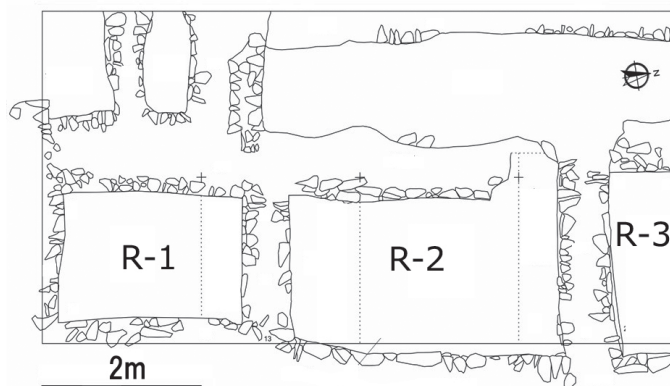


図4 Sector I、Unidad 8 平面図

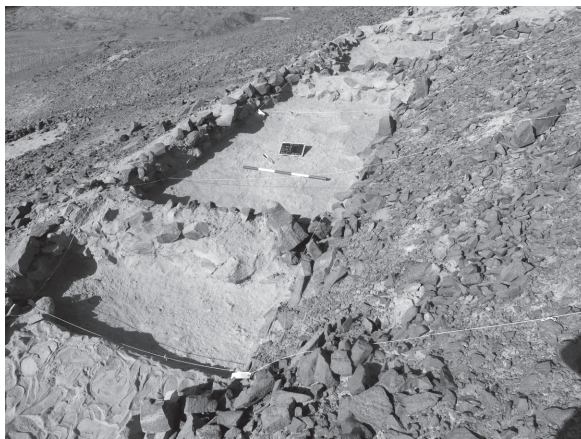


図5 Sector I、Unidad 8 北から

Unidad 8

Unidad 8 を設定したテラスは仕切り壁によって部屋状構造を呈しており、異なるテラスに通じる通路らしきものの存在も表面から見て取れる。発掘区においても2つの仕切り壁によって分けられた3つの部屋状構造(R1-3)が出現した。発掘の結果、表層からは少量のイカ期の土器が見つかったが、その下の建築に直接対応する層に伴う土器はその全てがナスカ早期のものであった。さらに床面らしき層の下から数多くのレンズ層が現れ、ナスカIの土器と共にすり石などの石器、木製品、動物骨などが出土した。最も小さな部屋であるR-1からは地山に掘りこまれた3つの穴が確認され、多くの炭化物と植物遺存体が見つかった。

このテラスにおける最初の利用がナスカ早期であることは確実であるが、イカ期にも建築の大きな改変なしに再利用されたのであろう。食糧の残滓と考えられる遺物、煮炊きの痕跡から考えて、ナスカ早期に関しては明らかに居住の場として使われていたと考えられる。一方で、個人の富を示すような装身具や装飾土器など、社会の階層化を示唆するような遺物は全くと言ってよいほど確認されなかった。イカ期の遺物が表層に限定されており、対応する床面が確認されなかった点は、同時期の使用が短期間にとどまったことを示唆しているのかもしれない。

4-2. Sector II の発掘

Sector II においては、Sector I と Sector III の谷間に位置する建築集合に発掘区(Unidad 4)を設けた(図6, 7)。なだらかな丘の斜面をテラス状に成形し、およそ10m×10mの範囲に四つの部屋状構造が配置されている。シルバーマンの記録の通り、建築の残りが非常によく、壁のつくりなども緻密なものである[Silverman 2002: 78]。

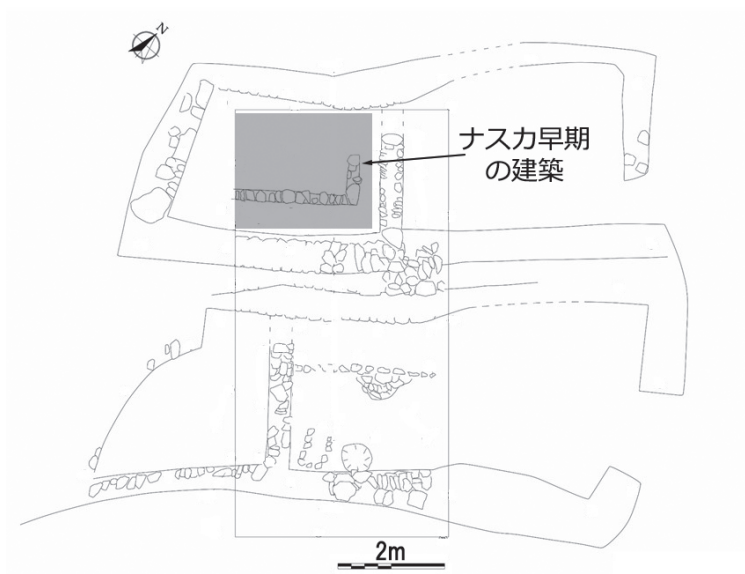


図6 Sector II、Unidad 4 平面図



図7 Sector II、Unidad 4、北東から

Unidad 4

上述の建築はテラスによって高い部分と低い部分に分けられていたため、双方を調査できるように 4m×8m の発掘区を設定し Unidad 4 とした。この発掘区からは、炉の痕跡や動植物遺存体など基本的に居住の痕跡を示すデータが得られており、表面に見えている建築に対応して出土した土器はイカ期のものだった。唯一の例外は、上段に位置する建築の床面下から出土した部屋状の構造であり、この建築に対応する層位からのみナスカ早期の土器が出土した。

発掘調査のデータからは、表面から確認可能な部屋状構造はイカ期の住居址であったことが示唆されており、斜面をテラス状に成形した後に建築されたことになる。その一方で、ナスカ早期の建築がイカ期の建築に完全に埋められる形で出土したことは、最初の居住がナスカ早期であったことを示している。いずれの時期にせよ、エリート層の存在を示唆するような遺物は出土しなかった。

4-3. Sector III の発掘

シルバーマンによる考察では、この地区の建築は丘陵の上部で造りが良く、下部では造りが粗く崩れた建築が目立つため、それぞれがエリート層とそれ以外の居住域に対応することが示唆されていた。そこで上部の建築と下部の建築にそれぞれ主要な発掘区を設けた（上部：Unidad 2、下部：Unidad 1）。また、双方の間に開けた空間の存在が見て取れたため、広場などの公共空間の存在を想定した発掘区を設けた（Unidad 5）（図3）。

Unidad 2

丘陵上部に位置する部屋状構造に対しては、南北に3つの部屋状構造が連なる場所に8m×4mの発掘区（Unidad 2）を設定した（図8,9）。この区の層位は極めて単純であり表層の下からは床面が断片的に確認され、床面に対応する炉と思われる炭化物の痕跡が確認された。土器はイカ期のものであり、当時の住居であったと考えられる。床面の下からは丘陵の斜面をテラス状に成形した際の礫と砂が混じった層が確認された。この層からは、ナスカ早期か前期と想定される土器片が出土している。このような発掘データは、丘陵上部の部屋状複合がイカ期の居住域であったことを示している。一方で、床面下から出土した地形を整形した層からナスカ早期、あるいは前期の土器が出土していることは、この場所において早い時期に散発的な活動があったことを示唆している。ただし、その活動は活発な建築活動を伴うようなものではなかったのではないだろうか。

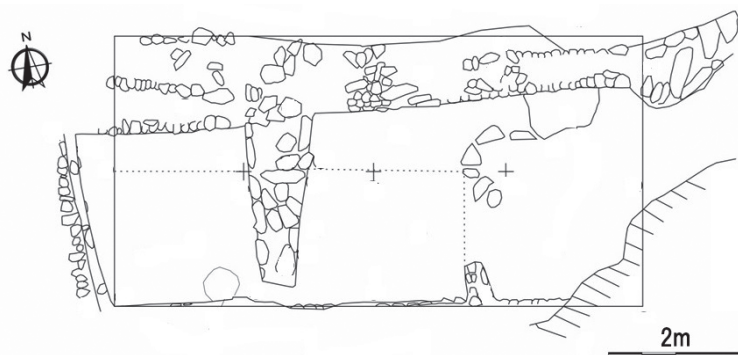


図8 Sector III、Unidad 2 平面図



図9 Sector III、Unidad 2 東から

丘陵中ほどにUnidad 5、丘陵下部にUnidad 1という発掘区をそれぞれ設け、比較的広範囲の発掘を行った。

Unidad 1

Unidad 1 は2段のテラス状の構造物とその上に配された部屋状建築群が確認できる場所に設定された（図10, 11）。このテラスはそれぞれ斜面の地形に沿って20～21mにわたって広がっている。地形に合わせた建築であるためか、その幅も2.0～2.5mと場所によってばらつきがあり、全体としては長方形でありながらも不規則な印象を与える形状を呈している。建築の機能を考察するために一つのテラスで広範囲を発掘する必要があること、二つのテラスの時期的な関係を分析する必要があることから、南北12m、東西10mの範囲にL字の形で発掘区が設定された。層位は極めて単純であり、表層下からは床面と炉の痕跡が出現し、装飾の少ない碗や甕などの日常用と思われる土器、食材の加工に使ったであろうすり石などの石器が有機物と共に出土している。石壁と対応する床面の発掘からは、この居住空間が少なくとも3度の改変（床の張替え、部屋の仕切りの増築）を受けており、その全てにおいてナスカ早期の遺物を共伴していることが明らかとなった。

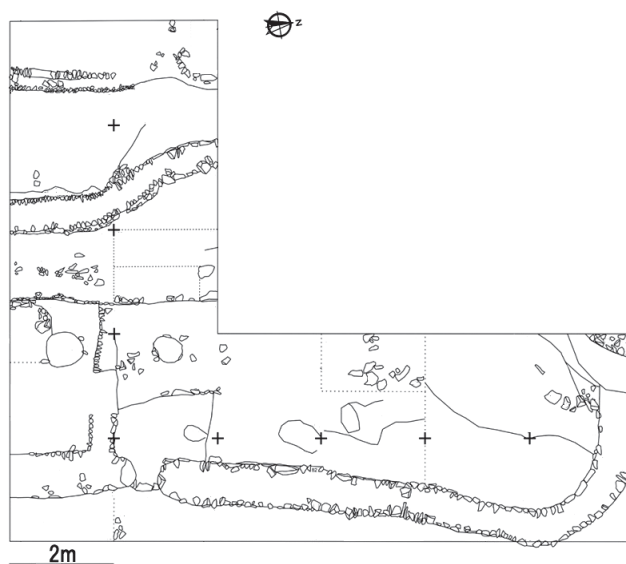


図10 Sector III、Unidad 1 平面図



図11 Sector III、Unidad 1 東から

Unidad 5

Unidad 5 は Unidad 1 から 500m ほど北に位置しており、Unidad 2 と Unidad 1 の中間に位置している。台形の空間があることが分かっていたため、地表から観察できる壁の形状に合わせて $4\text{m} \times 4\text{m}$ 、 $4\text{m} \times 6\text{m}$ の 2 つの範囲を結合する形で発掘区を設定した (図 12, 13)。表層を剥ぐとすぐに断片的な床面が出現し、台形状の空間を区切る石壁が出現した。上段と下段を分ける両面壁以外に仕切り壁などが全く確認できなかったことから (図 12)、この空間は広場などの公共空間であることが想定される [e.g. Vaughn et al. 2016]。出土遺物から広場はナスカ早期につくられたことが明らかである。しかしその一方で、広場の床面の下、地山との間の層からはパラカス後期(紀元前 380-260 年)らしき土器も出土しており、この空間の使用が始まった時期がナスカ早期より前にさかのぼる可能性が想定される。また、他に注目すべき点としてこの広場と Unidad 1 の居住域が通路で結ばれていた可能性が指摘できる。居住域と公共空間が連結されていたのであろう。

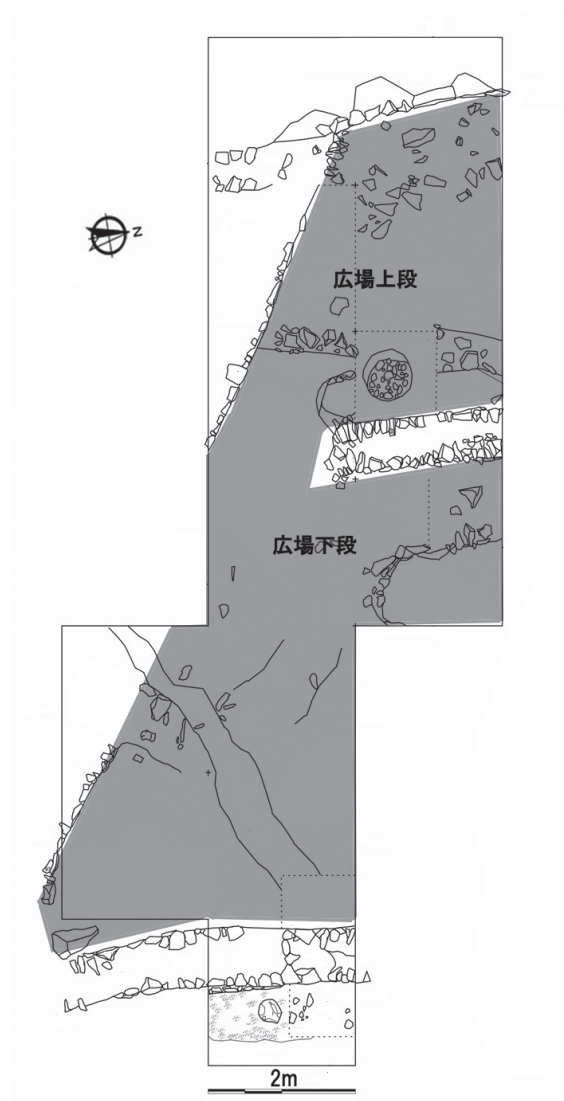


図 12 Sector III、Unidad 5 平面図



図13 Sector III、Unidad 5 東から

5. まとめ：エストゥディアンテ遺跡の編年と社会組織に関する予備的考察

エストゥディアンテ遺跡の発掘調査によって同遺跡の編年上の位置づけが従来の想定と異なることが明らかとなった。シルバーマンの想定と合致するナスカ早期のみに機能した遺跡ではなく、実際には同時期に加えて、後期中間期のイカ期の建築が分布していることが判明した。とりわけ、エストゥディアンテ遺跡で丘陵上部に位置する建築に関してはイカ期の建築が大部分を占めている。その一方でこのようなデータは、ナスカ早期の建築が遺跡の高度が低い部分にのみ位置することを必ずしも意味しない。Sector II の Unidad 4 における発掘の結果、ナスカ早期の建築がイカ期の建築の下に埋もれていることが確認され、Sector III の Unidad 2 の発掘からは、ナスカ早期～前期と想定される土器片が床下と地山の間の層位から発見された。このようなデータは、少なくとも現在目にすることができるテラスの一部は、ナスカ早期に斜面を整形することで形成され、イカ期に再利用されたことを示唆している。

一方で、ナスカ前期に関しては、散発的にナスカ前期に対応する土器が出土しているものの、建築との明確な対応関係が確認できた事例は今回の調査では見つかっていない。エストゥディアンテ遺跡の発掘においては、様々な発掘区を比較的広い面積で調査することができた点を踏まえると、ナスカ前期の居住に関しては、存在しなかったか、ごく小規模なものであったという想定が可能である。

今回の調査によってナスカ早期の社会組織に関してもある程度考察を行うことが可能となった。詳細は現在進行中の遺物分析の結果を待たねばならないが、ここで可能な範囲で考察を行い、先行研究で示された視点を検討しておきたい。本調査の成果で重要なのは、エリート層の存在など社会の階層化を占めずデータがほとんど得られなかったという点である。建築における質の違いは、同時代における階層差を示すのではなく、ナスカ早期とイカ期というそれぞれの建築の編年上の違いに帰することが明らかとなった。一方で広場の存在など、公共空間が遺跡内に存在していた点は、シルバーマンの主張を一部支持していると言えよう。今後それぞれの発掘区で得られたデータの詳細な分析を通じて、遺跡内で離れて位置する居住区がお互いにどのような関係にあったのか、区ごとに機能差などが存在するのか、といった問題点を考察していくことが重要であろう。

【謝辞】

エストゥディアンテ遺跡の調査は、JSPS 科学研究費（課題番号「26101004」）の助成をうけて実施されたものである。調査に際しては、山形大学ナスカプロジェクトの関係者に多大なご支援をいただいた。山形大学の山本睦氏には草稿に目を通していただき、助言をいただいた。この場をお借りして、厚く御礼を申し上げたい。査読者からは極めて有益なコメントをいただいた。記して感謝申し上げる。

註

- (註1) 編年的枠組みとしては、最も新しいデータに基づいた編年案であるドイツ隊のパルパ河谷のデータに基づいた編年を採用した [Unkel et al. 2012]。山形大学チームの近年の調査によって、少なくともインヘニオ河谷においてはこの年代を修正する必要があることが明らかとなりつつあるため、ナスカ早期をめぐる絶対年代の問題に関しては、稿を改めて論じる予定である。
- (註2) シルバーマンは、ナスカ早期という用語は用いずにローレンス・ドーソンによるセリエーション編年のナスカ 1 という用語を用いている [Silverman 2002; Silverman and Proulx 2002]。ドーソンの編年は土器様式が時間と共に変化することを前提としているため、様式名称と時期名称が結びついていて、近年の調査によって彼が異なる時期とみなした複数の土器様式が地域的バリエーションとして同時代に併存していることが明らかとなっており、両者の結びつきを前提として議論を進めることは不可能である [e.g. Charmichel 2019]。このため、ドーソンの区分によるナスカ 1-7 を時期区分として用いることは現状適切ではない。現状時期区分として最も適切と考えられるのは註 1 で述べたドイツ隊の編年的枠組み [Unkel et al. 2012] であり、本論でもこの枠組みを用いることとする。したがって、シルバーマンによる時期区分としてのナスカ 1 は本論で述べるナスカ早期に対応することとなる。ただし、シルバーマンが遺跡の時期同定を行うための指標として用いた土器様式としてのナスカ 1 は上記の編年的枠組みにおけるナスカ早期の土器様式の全体をカバーするものではない(表 1)。したがって、本論ではシルバーマンの論考における記述に関して述べる場合にのみ土器様式としてナスカ 1 の語を用い、筆者たちの記述に関してはナスカ早期の語を用いることとする。
- (註3) 一方でシルバーマンは、この居住か祭祀空間かという二分法自体を批判している。その批判は「エリート層の住居が祭祀的儀礼的な機能を有する可能性がある」というものであり、階層的な社会組織の存在を前提とした視点といってよい。
- (註4) この点に関して、何をもって「つくりの良い」、「質が高い」、あるいは「規格化されている」とするかをシルバーマンは明確にしていない、ただし、長方形の建築が、並行かつ対照的に配置される点と壁の石材が緻密に配置されている点を重視している様子が写真のキャプションからもうかがえる [Silverman 2002: 80-81]。

参考文献

松本雄一

- 2019 「第2章第4節 インヘニオ谷の社会変動—形成期からイカ期までの展開」 青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木紀 編『古代アメリカの比較文明論：メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』pp. 172-187、京都大学学術出版会。

Carmichael, P. H.

- 2019 Stages, periods, epochs, and phases in Paracas and Nasca chronology: another look at John Rowe's Ica valley master sequence. *Ñawpa Pacha*, 39(2): 145-179.

Sakai, M. and J. Olano Canales

- 2017 Programa de Investigación Arqueológica de las Líneas y Geoglifos de las Pampas de Nasca, Plan Bianual, No1 Años 2015-2017 Informe Final, Tomo 1, submitted to the Ministerio de Cultura del Perú.

Silverman, H.

- 1990 Beyond the Pampa : the Geoglyphs in the Valleys of Nazca.. *National Geographic Research* 6: 435-456.
2002 *Ancient Nasca Settlement and Society*. University of Iowa Press, Iowa.

Silverman, H. and D. Proulx

- 2002 *The Nasca*. Blackwell, Malden/Oxford.

Unkel, I., M. Reindel, H. Gorbahn, J. A. Isla Cuadrado, B. Kromer, and V. Sossna

- 2012 A Comprehensive Numerical Chronology for the Pre-Columbian Cultures of the Palpa Valleys, South Coast of Peru. *Journal of Archaeological Science* 39: 2294-2303.

Vaughn, K. J., C. A. Conlee, H. Van Gijseghem, and V. H. Whalen

- 2016 Plazas and communal space in Nasca: changing patterns of public ritual through the Formative and Early Intermediate periods (800 B.C.–A.D. 650 on the south coast of Peru. *Ñawpa Pacha* 36(2):111-138.

原稿受領日 2020年5月20日

原稿採択決定日 2020年8月19日